

改訂第2版の推薦のことば

大学や会社において、女性が働きやすく、活躍できる組織にしようという運動が盛んである。特に、管理職や責任あるポジションに女性が少なく、様々な指標で日本は最下位に近い。大学においても女性の教員、管理職登用に数値目標を設けたり、diversity宣言をしたりして努力しているが、なかなか実績が上がってこない。放射線科においても、ポストが上にいくに従って女性の比率が低く、サブスペシャルティの学会や研究会でも、役職に就いている女性の比率は低い。

この中で唯一、婦人科画像診断は女性が優位な領域である。婦人科画像診断のセッションでは、学会で発表する人も、それに質問する人も、そして座長も女性という場面をよく見る。MRIが婦人科画像診断に用いられた頃から現在に至るまで、この傾向は変わっていない。能力ある女性達が、長い間努力して、遠慮なく活躍できる領域として築いてきたのであろう。今岡いずみ博士、田中優美子博士はその代表であり、現在も第一線の放射線科医として活躍している。二人の力を結集して2004年に出版した『KEY BOOK婦人科MRIアトラス』は、長い間、婦人科MRIを読影する上での標準図書であり続けてきた。

その後、2014年には、田中優美子博士は産婦人科の画像診断全般を解説した教科書を出版され、その高い能力を改めて感じさせられた。そのお二人が『KEY BOOK婦人科MRIアトラス』を大幅に改訂して世に出されると聞き、その変わらぬエネルギーに脱帽した次第である。改訂第2版は初版に比べて100ページ以上増えており、選び抜かれた画像が数多く示されている。これらの画像が、分かりやすい解説と相まって、理解を助けている。

改訂第2版のもう一つの特徴は、坪山尚寛博士が加わったことである。坪山先生は卒後間もなくして、近畿大学で今岡先生とともに働き、婦人科画像診断に興味を持った。その頃ISMRM (International Society for Magnetic Resonance in Medicine) でお会いして、その高い能力に強い魅力を感じたのをよく覚えている。その後、学会活動、執筆、講演と目覚ましい活躍をしておられる。今回、お二人に伍して執筆され、改訂版に新鮮な魅力を与えている。誠に素晴らしい人選であり、今後の活躍を心より期待している。

取扱い規約の改訂や勤務先の異動があったりして、やり直しや中断を余儀なくされたであろう。このような困難を乗り越えて、大変な努力の上に本書が完成されたことは想像に難くない。今後10年は、婦人科のMRIを代表する教科書として用いられ続けるであろう。三人の先生に、婦人科MRIに興味を持つ放射線科医を代表して、厚く感謝の気持ちを捧げたい。

2019年3月

神戸大学理事・副学長
杉村和朗

改訂第2版の序

早いもので、初版を上梓してから、干支が一回りともう少し経ちました。この間、手にとって下さった方々のお陰で、『KEY BOOK 婦人科MRI アトラス』は育ってきたと思います。本当に有難いことと、心より感謝申し上げます。

婦人科領域の画像診断のみならず、画像診断全般において、現在はかなり成熟した時代であると感じます。初学者にとっては、最初から非常に高い山が領域ごとにそびえ立っているように思われることでしょう。一方で、この登山で六合目あたりに来た中堅者にとっては、今まで踏みしめてきた道を振り返る作業と、さらに目指す方向を探す作業とで、いくら時間があっても足りません。

本書がアトラスの名の通り、“役立つ地図”となれるよう、編著者一同、持てる力を振り絞りました。基本的には初版の構成を踏襲していますが、疾患の項目を増やしたことや、できる限り多くの症例を載せたことから、ページ数は増やさざるを得なかったことをご了承ください。

画像診断の世界を登山になぞらえましたが、では頂上はどこにあるのか、と問われると残念ながらわかりません。駆け出しの頃、いつか山頂から景色を見るように、全てが解る日が来るのだろうかと思っていました。そんな日は来ない、ということだけはわかりました。形態診断だけの時代は過ぎ、機能診断が当たり前のように組み込まれ、さらにブレイクスルーがあり、AI (artificial intelligence) も参入し、今後も刻々と変化していくのでしょうか。時代が変わっても、最終的な目的は患者さんの利益であることを忘れずにいたいと思います。

放射線科、産婦人科でご指導いただいた多くの先輩方、同じ道を目指す皆様、いつも凄い画像で唸らせてくださる技師の皆様、たくさんの方々に今日までの御礼を申し上げたく思っております。

代表として、初版に続いて推薦のことばをお引き受けくださった杉村和朗先生に深謝いたします。また、改訂の話はもっと前から浮かんでいましたが、上手く波に乗れず泡のような日が続きました。その間、じっと辛抱強くお付き合いくださった原田顕子氏、学研メディカル秀潤社の編集部諸氏、栗田由香里氏、谷口陽一氏、そして吉安俊英氏に、感謝いたします。

2019年3月 よく見ればあとさき多きつくし哉 (子規)

今岡いずみ
坪山尚寛
田中優美子

初版の推薦のことば

冬のシカゴはとても寒い。正直ほとんど楽しみもなくRSNAに参加している。来年こそは不参加にして、優雅な年末を過ごそうと思うのだが、気が付けばシカゴ、というのが20年以上続いている。その中で、1つ楽しみがある。Girl's nightである。RSNA 3日目の夜、trendy restaurantで開かれる。主催はDr. Susan Ascher, regular memberに富樫かおりさん、今岡いずみ君、と私が入っている。何故Girl's nightに私が？この会への参加条件は、富樫先生を尊敬する女性医師ということになっている。そして、富樫さんの宿敵であるという理由から、私に加わっている。

別に女性臓器だから女性が診なければならない理由はない。特に画像であるから、男性が読影すること何ら差し障りは無いはずである。ところがこの領域の女性放射科医の活躍はめざましい。これは日本に限らず、欧米においてもそうである。ちなみに私が留学していた時のボスはDr. Hedvig Hricakといい、今はRSNAのBoard of trusteeをしている女性放射科医である。もちろん、日本には世界に誇る富樫かおり先生がいる。

領域は違うが、私が最も尊敬していた放射線科医は板井悠二先生である。富樫さんも、誰にもまして彼を尊敬していた。そして、彼の身近に、やはり彼の心酔者がいた。田中優美子さんである。関東の地に婦人科MRIを根付かせ、筑波から多くの業績を世界に発信し続けている。素晴らしい能力と努力の人である彼女の目標は富樫かおり先生である。勿論、今岡君も同じ目標を持っている。

さて、一昨年のRSNAが終わってしばらくしてから、今岡君が、長年の構想があるのだが、それを実現したいと相談に来た。Practicalなところと、academicな内容が程良くミックスされている企画であった。彼女は1人でコツコツと努力し、着実に仕事を成し遂げている。必ず良い本ができるであろうと思い、誰と執筆するかを尋ねた。田中さんと何度も意見を交わしているとのこと。それなら問題はない。成功を強く確信し秀潤社の須摩さんに引き合わせた。勿論、すぐ了解された。

彼女たちは何時も1例ずつレビューし、考え、それをまとめ上げてRSNAに出し、英文論文にまとめ上げている。本書も人の論文だけを頼りにして書かれていない。長年の蓄積の重みが、本のあちこちできらめいている。ページをめくりながら、よく書いたものだと彼女たちの努力に敬意を感じる次第である。一般診療にたずさわりながら、本書を書き上げるのは本当に大変であったらうと、改めて感心する。

本書は彼女たちが尊敬し目標としている板井悠二先生と富樫かおり先生、良きパートナーであるDr. Ascher、彼や、彼女たちのしっかりとした土台の上に作られた著書である。女性による女性のための婦人科MRIの定番として、本書を是非放射科医、婦人科医に勧めたい。男性医師にも、より役立つ本であることは言うまでもない。

2004年3月

神戸大学大学院医学系研究科生体情報医学講座教授

杉村和朗

初版の序

時折、研究会や学会で話をする機会をいただくようになり、相手に自分の考えを伝えることの難しさを痛感することが多くなりました。多くを表現しようとすれば漏れ落ち、漏れなくやろうとすれば狭い範囲に限られます。いきおい、最大公約数で無難に、となるのですが本当に相手の求めていることなのだろうか？そのようなことを考えていると自分自身の内に何か溜まっていくのを感じていました。

婦人科疾患の画像診断は今や特殊なものではなくなり、先達の無数の尽力の上に目覚ましい発展を遂げています。しかしながら、多くの画像診断医にとって、新たなエビデンスを取り入れながら診断レポートを作成するのは容易なことではありません。そこで、本書は初心者のために日常診療に役立つ婦人科領域の画像診断の基本と、中堅として画像診断に関わる読者のためにさらに専門領域へ踏み込んだ解説を盛り込んだ、使いやすい専門書を目指しました。既刊のKeybookシリーズは著者も愛読していますが、研修医もその道の達人も気軽に手に取って利用されているのを目の当たりにして、その魅力に少しでも近づけるよう心掛けたところです。本書においては「疾患から始まりその所見解説」の構成にとどまらず、「症候や所見から始まり鑑別診断と解説」の構成を積極的に取り入れて、実際の読影手順に沿うことを目指しています。特に6章はその色合いを濃くしており、今岡と田中が呻吟した結果、重なる項目を敢えて省かず、入り口を複数呈示しました。エビデンスからはずれないよう気を付けましたが、最大公約数を越えて踏み込んだ冒険になりました。

症例の選択には細心の注意を払いましたが、日々最高の画像を目指して下さる技師の方々の努力には、改めて頭の下がる思いがいたします。画像の源は一人一人の患者さんですが、本書が患者さんの利益としてフィードバックされることを切に願います。

思えば、今まで本当に多くの方々にお世話になり、育てていただきました。ここに皆様のお名前を挙げて感謝を申し上げたいところですが、かなわぬ非礼をお許し下さい。その代表として、いつも暖かく見守って下さり、本書の序文もお引き受け下さった杉村和朗先生に、深く感謝を申し上げます。また、長年にわたり厳しくも優しくご指導をいただいた板井悠二先生が、本書の完成を見ずにご逝去なされたことは誠に残念でなりません。謹んで御霊前にご報告し深謝申し上げます。最後に、編集にあたり大変お世話になった原田顕子氏をはじめ画像診断編集部諸氏に、感謝いたします。

2004年3月 鶯の鳴いた日に

今岡いずみ
田中優美子